



武蔵国川越城絵図（川越市立図書館蔵）

## 第5回企画展

### 川越城 —— 失われた遺構を探る ——

川越はかつては川越藩の城下町として、「小江戸」と呼ばれる繁栄を築いたところです。城下町は城を中心として成立した町といわれるように、川越の繁栄も川越城の存在を無視することはできません。川越城は長禄元年（1457）に扇谷上杉持朝の命によって、家臣の太田道真・道灌父子によって築かれました。太田道真・道灌は室町時代の武将で、築城家としても知られています。川越城は川越台地の北東端に巧みに築城されています。やがて江戸時代になると、川越城は藩主の居城として政治・経済の中核と

なり、城の拡張や城下町の整備が大規模に行われました。明治初年まで続いた川越城の城郭は、本丸・二の丸・三の丸などの曲輪、3つの櫓、13の門よりなり、総坪数は約4万6千坪といわれています。今回の第5回企画展では、こうした川越城の姿を、絵図・発掘出土品・遺構などで探ってみようと企画しました。川越城は資料などの制約により、その縄張の変遷や城内の建物の様子など不明な部分が多くあります。今回の企画展が契機となり、川越城の姿が少しでも解明されていけばと考えております。

## 昨年春のアンケートから ～入館者の声～

### 〔1〕 はじめに

川越市立博物館は平成2年3月の開館以来2年を経過し、平成3年10月末には通算入館者数が30万人を越えました。そこで、現在の入館者の動向を知り、将来の事業の指標とするためアンケートの結果に基づき考察してみたいと思います。

### 〔2〕 アンケートの実施時期について

アンケートの実施期間は、①ある程度の入館者が見込める、②なるべく多くの年齢層の入館者が期待できる、③期間は3ヶ月程度とするなどの条件により、平成3年4月2日（火）から6月30日（火）までとしました。この期間は、第3回企画展「松平周防守と川越藩」の後半と第4回企画展「美の先達者たち～鏡に見る日本の美と心～」の全期間にわたり、さらにゴールデンウィークを含みます。

### 〔3〕 アンケート実施期間の入館者数と回収率

アンケート実施期間の入館者は合計51,803名にのぼり、その内訳は「表1」のとおりです。

また、アンケートの回収率と入館者に対する回収率は「表2」のようになります。

（表1）アンケート実施時期（平成3年4月2日～6月30日）

	一般	団体	共通券	共通券 他館購入	招待	免除	合計（）は全 体での比率
大人	12,855	1,467	6,429	7,301	347	4,385	32,784（63.3%）
学生・生徒	1,256	56	503	908	12	10,100	12,835（24.8%）
児童	2,148	0	601	481	40	2,914	6,184（11.9%）
合計	16,259	1,523	7,533	8,690	399	17,399	51,803（100.0%）

（表2）アンケート回収数・回収率表

	入館者数	アンケート 回収数	（）は全 体での比率	回収率
大人	32,784	2,055	（82.6%）	6.3%
学生・生徒	12,835	260	（10.4%）	2.0%
児童	6,184	174	（7.0%）	2.8%
合計	51,803	2,489	（100.0%）	4.8%

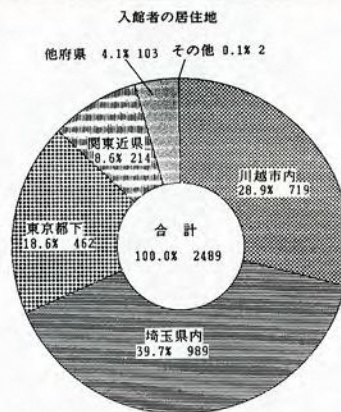
回収率の問題、特に合計すると入館者総数の

約36%を占める団体入館者、小中学生についての回収量が不足しているという点から見ると、必ずしも正確とは言い難い面もありますが、一般的な傾向を見る上では参考になると考えられます。

### 〔4〕 多い市内・県内からの入館者

一般の入館者においては、「グラフ1」のとおり市内および県内からという場合が最も多く全体の7割弱を占めています。

（グラフ1）どちらからおいでになりましたか？



ここで注目したいことは、気軽に来館できる距離にある市内からの入館者よりも県内各地から

の入館者が多いということです。

このことから、現状においては市民が川越の歴史・文化を再発見しようとする傾向とともに川越へ日帰りで見学される範囲

（県内・都内・近県）から観光

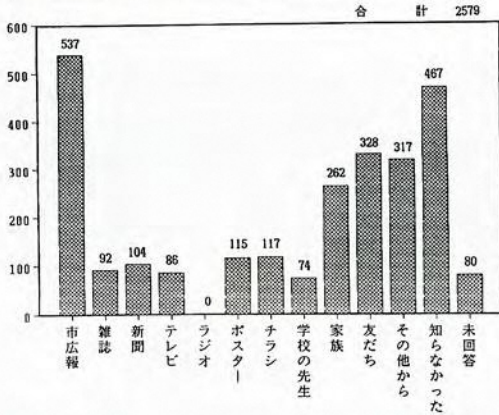
目的で入館するという利用状況が中心となっていると考えられます。

なお、グラフには現れませんが、中学校における博物館利用の状況も都内・県内がほぼ同水準で多数を占めています。これは、中学校における修学旅行の事前学習として教育課程に位置づけた“川越探訪”によるものです。

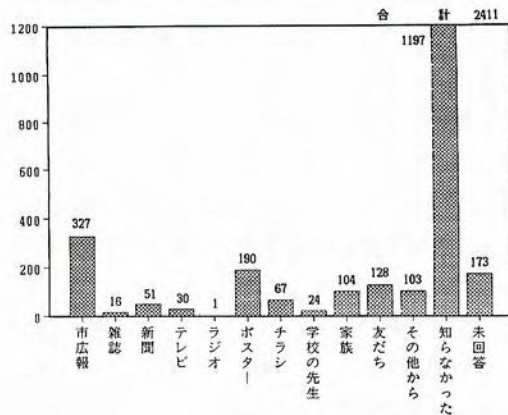
〔5〕 大きい「市広報」の影響力

ここでは、博物館自体についての情報源「グラフ2」および企画展についての情報源「グラフ3」について考えてみましょう。

〔グラフ2〕博物館を何で知りましたか？



〔グラフ3〕今回の企画展を何で知りましたか？

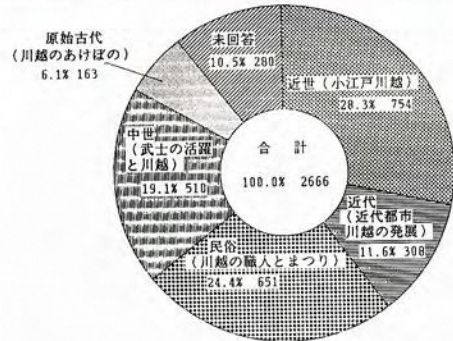


この中で目立つのは双方を通じて「市広報」によるPR効果が大きいということ、広報が広く市民に読まれているということです。また、「聞き伝え」による影響が多いということは「来館者ひとりひとりの力」という点で注目すべきことでしょう。

また、放送情報および広告媒体による割合が小さいこと、「知らないかった」が量的に多いことについては今後の課題と考えています。

〔6〕 印象的な近世・近代・民俗コーナー

〔グラフ4〕最も印象に残った展示コーナーは？



川越市立博物館は、その建設過程において「川越の歴史が総合的に理解」でき、「特に近世に重点をおく」展示を行うことがうたわれています（昭和61年8月27日付川越市立博物館建設委員会第1次中間答申）。したがって、この設問はその展示構想が入館者に反映されているかを知る上で参考となります。

その点から考え「特に印象に残った展示コーナーについて」が近世・近代・民俗で合計64.3%という今回の結果「グラフ4」は、ある程度答申で示された展示構想に比べられたといえるのではないのでしょうか。

〔7〕 おわりに

今回のアンケートは、回収率4.8%という状況でしたが貴重な示唆を与えていただけました。

今回のアンケートでは、自由意見の記入欄も設けられ館への意見・要望等も数多くいただいております。

今回、紙面の都合上紹介できませんでしたが、機会を改め、改善策や館の現状等を踏まえながら掲載させていただく予定です。

文末となりましたが、回答くださった2,489名の皆様の声を今後博物館の事業の推進に活用させていただくとともに、ご協力くださいました方々に心よりお礼申し上げます。

（学芸員 鹿倉 航）

## — 川越の生んだ鬼才 —

いわ さき かつ ひら  
岩 崎 勝 平

岩崎勝平は川越が生んだ鬼才の洋画家です。明治38年（1905）洋物商を営んでいた岩崎育太郎・満つの七男として市内南町（現幸町）で生まれました。川越中学校（現県立川越高等学校）在学中から絵画の道を志すようになり、大正11年頃（1922）から岡田三郎助が開いていた本郷洋画研究所へ通い始めます。この時から生涯の師として岡田三郎助に師事し、大きな影響を受けました。大正12年（1923）に川越中学校を卒業し、大正14年（1925）に東京美術学校（現東京芸術大学）西洋画科へ入学し、浪漫主義絵画の旗頭であった藤島武二の指導を受けました。



川越中学校時代の岩崎勝平

昭和5年（1930）東京美術学校を卒業し、新進画家としての人生がスタートします。岩崎勝平の画家としての生涯を、その画業から分類すると大きく二つに分けられます。戦前の充実した油彩画家として活躍した時代と、戦後の優れた鉛筆デッサンに見られるような素描画家としての時代です。

岩崎勝平は、光風会、春台美術展など官展系の団体に作品を発表し画壇へ登場しましたが、昭和11年（1936）の文展で「小憩」が選奨を受け、翌12年の新文展で「焚木はこび」が特選と

なって2年連続して受賞し、昭和10年代の画壇で、新進画家としてその将来を大いに囑望されました。



焚木はこび（東京国立近代美術館蔵）

岩崎勝平は、この後、昭和16年（1941）の春台美術展に「父の霊に捧ぐ」を出品し、師、岡田三郎助の名に因んだ最高賞である岡田賞を受賞しています。そしてこの年の文展では無鑑査となりその画業は高く評価されました。

しかし、画家として本格的にさらに飛躍しようとする時に、岩崎勝平の人生は大きく変わってしまいます。昭和16年の春、斉藤五百枝という先輩画家の娘、百響と結婚しましたが、その年の暮れに不幸な出来事から新妻を亡くし、大きな精神的痛手を負い、また父の死後、経済的に困窮するようになり、昭和17年春頃から、画壇を離れ、生来の孤独癖も強くなって性格的にも屈折し、放浪の生活を送るようになります。貧困と放浪の生活の中で絵具代にも事欠くという、落ち着いてじっくりと制作に没頭できるような環境になかったこともあって、作品数も少なく、総体的には寡作な作家であったと言えます。

恵まれた環境の中で思う存分勉強し、油彩による本格的な制作ができたのは、東京美術学校を卒業した昭和5年頃から画壇を離れる昭和17年頃までの約12年間でした。新進画家として充

実した時代の岩崎勝平は、太く短くその一生を終えた感があります。

戦後の岩崎勝平は、昭和20年代中頃から30年代中ば頃までの約10年間に優れた素描画家として復活したと言うこともできます。この時代の素描作品には、他の追随を許さない素晴らしいものが多く、改めて再評価する必要があります。油彩と素描という材料の違いはあるにせよ、そこに流れ、迸り出てくるもの、泉のごとくとうとう湧き出てくる才能、個性は、少しも衰えることなく一貫して発展し花開いたものです。



川端康成あて書簡

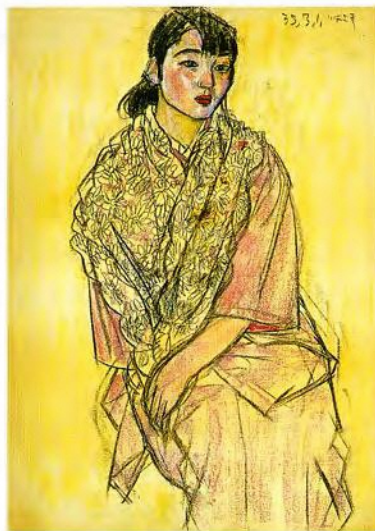
戦後、作家の川端康成らの知遇を得、その支持、援助により昭和25年頃(1950)から東京百景と題して鉛筆デッサンによる東京の風景画を制作し、展覧会を2回程開催してその成果を発表しています。川端康成は、岩崎勝平の画家としての才能を高く評価し「神さま絵かき」の尊称で呼んだ程です。この東京百景は川端康成の文章にも出ていますが、1枚のデッサンを仕上げるのに数ヶ月も要し、しかも5Hとか7Hとかの硬い細く尖った鉛筆で強く一本の線でデッサンしたものですから、線が狂っても書き直しが効かないし、また途中で芯が折れると消しゴムを使わず、それを反故にしてまた新しい紙に書き直すという大変な苦勞をして完成されたといえます。

東京百景と並んで戦後の岩崎勝平の代表的な仕事として女十二題と題する婦人像デッサンを挙げることができます。女十二題は、若い女性をモチーフにしたデッサンによる作品ですが、



東京百景

初めの頃は木炭・コンテ・鉛筆などを使い、昭和30年代に入るとパステルを使った色彩豊かなものになってきます。デッサンは厳しく、鋭く、正確で、素描画家としての天分が遺憾なく発揮されています。



女十二題

東京百景、女十二題は、一部の識者から高い評価を得ましたが、シリーズとして未完成のまま、昭和39年(1964)の岩崎勝平の死とともに終わります。岩崎勝平の残した作品は、大作から小品にいたるまで対象を的確に捕らえ、その本質に迫る、画家の激しい性格、個性が余すところなく発揮された珠玉のような輝きをもったものばかりです。ここに鑑賞する人を魅了する岩崎勝平芸術の真髓があります。

(学芸係長 小林 誠)

## 社会教育と博物館(2)

学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する、諸施設と協力し、その活動を援助すること。(博物館法第3条第1項より)

〔はじめに〕

「葉師堂の中に、絵馬や底抜け杓があるとは」

「中福村の資料が800もあったのですか」

「もう少しで、捨ててしまうところでしたよ」

これは、川越市中福地区の自治会の皆さん方の声の一部です。

〔公民館から博物館への連絡〕

昨年の6月、福原公民館から「公民館の写真クラブの人たちが仏像を見つけ、自治会の方たちも大切にしているものなので見ていただけますか。」との連絡を受けました。

このことが切っ掛けとなり、夏・秋・冬と延べ20日ほどの調査をする機会を得ました。

調査にあたっては、博物館の都合に全面協力していただき、文書目録の作成や資料の復元まで地域の皆さんと取り組むことができました。

短期間でこれまでの成果を得ることができたのは、公民館と自治会の皆さんとの信頼関係、公民館職員との日常的コミュニケーションの賜と心より感謝する次第です。

〔自治会・公民館・博物館合同調査〕

手懸けた資料は、誰もが見向きもしなかった「土埃にまみれた文書の入った茶箱とこすり」「泥をかぶった数々の小絵馬、底抜け杓」「バラバラになった素朴な十二神将像」です。

調査、整理を実施するにあたっては、“共に学び合う”ということで次のことを確認した上で実施しました。

- 調査や整理は、地域の人も参加できる前提で実施し、公開の場も考える。
- そのため、調査、整理にあたっては集まりやすい地元の集会所か公民館とする。
- 調査の方法は、博物館職員のもとで実施し、地域の方もそれに合わせていただく。



中福地区の皆さんとの調査風景

- 調査の時期については、博物館側の事業計画の合間を活用させていただく等々。

その結果、福原公民館の女性セミナーの郷土の歴史文化を学ぶ講座「ルックルック川越」の方たちも参加する機会となり、郷土川越、中福を再発見する場ともなりました。このことは公民館事業の柱としている「ふるさとカレッジ」の推進にも役立てたのではないかと思います。

博物館側では、博物館法第3条の中にある、対公民館との協力、活動への援助に関し、具現化するひとつの機会ともなりました。

〔おわりに〕

「自治会の方が、馬道とか牛道、鎌倉道、河岸道と呼ぶところがあるって……」

「福原にも、いろいろな歴史・文化があるのですね。」等々(福原公民館ルックルック川越の皆さんの声)。

今回の調査活動の成果は、単に資料の発見に止どまらず、地域の多くの方々と共に地域に埋もれた歴史・文化を学びあえたことです。その橋渡しとして担ったのが「公民館」であったことを改めて強調し、あわせて今後、市内17の公民館から情報を頂きながら市民と共に活動する博物館をめざしたいと考えております。

(教育普及係長兼指導主事 松尾 鉄城)

## 学校教育と博物館(3)

### 第3学年社会科の授業に 生かした博物館活用事例

博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助しようようにも留意しなければならない。(博物館法第3条第2項より)

社会科は広い視野から社会生活についての理解を図り公民的資質を養う教科です。このためには単なる知識の伝授ではなく、児童生徒一人一人にこれからの社会において主体的に生きていく力を育成することが求められています。

このような今日的な課題に立って、育てるべき目標のひとつに「社会的事象への関心・意欲・態度」があげられています。この目標は、広い視野から地域社会における関心をもつとともに児童生徒一人一人が調べることを通して、地域社会の成員としての自覚や歴史や伝統を大切にしようとする態度の育成にあります。このような視点に立ち、3年生が初めて歴史を学ぶとき、いかに子供たちが地域の歴史に対する興味関心を持つかは大きな課題ではないでしょうか。

教育委員会ではこのような社会科教育の課題解決のために教育課程に位置づけて博物館活用を推進しています。そのために毎年「むかしの勉強、むかしの遊び」のテーマで各関係機関の協力を得てミニ展示を行っています。

この企画は、「勉強」と「遊び」という子供にとって極めて関心の高い分野から、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんの子供

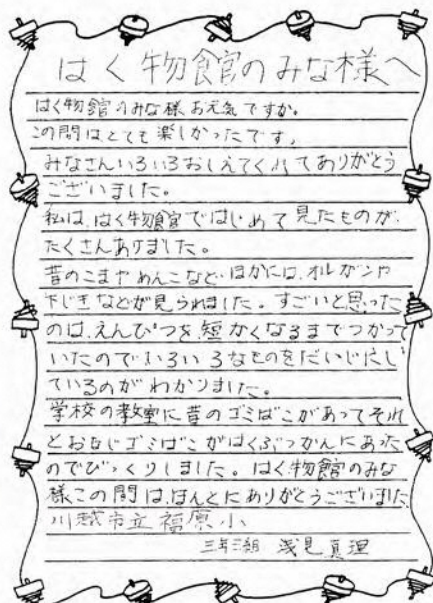


博物館での学習風景

のころを垣間見る展示です。古びた教科書やさびたブリキの玩具を現在の自分たちの学校生活や遊びと比べることは、時代の流れを感じるとともに、身近な文化財に対する興味や関心を高めることができると思います。

また、常設展示室では副読本の内容と関連させ、学習への意欲を高めるプログラムを実践しています。副読本に掲載されている地図や写真などの資料は博物館に展示している資料とたいへん関わりが深いものがあるものです。「川越市のうつりかわり」の学習にあたり、副読本という子供にとってたいへん身近なものや博物館の展示物をつなげ、歴史学習への関心と意欲を高めたことは下記の様な児童の感想にも現れています。川越の歴史や文化についてふれ地域社会の成員としての自覚をもつ第一歩となるのではないのでしょうか。

(指導主事 水谷 薫)



## ●●●ただいま準備中●●●

博物館では、市制施行70周年を記念して仙波東照宮宝物特別展観を開催します。

仙波東照宮は、寛永10年（1633）に天海僧正によって創建されました。同15年の川越大火によって焼失しましたが、同17年に幕府によって再建されました。現在仙波東照宮には、本殿、瑞垣・唐門、拝殿・幣殿、隨身門、石鳥居の建造物と岩佐又兵衛勝以の手による三十六歌仙額が重要文化財に指定されているほか、県指定文化財に指定されている鷹絵額など、川越が誇る文化財が多数残されています。

今回の展示では、三十六歌仙額36面のうち31面、鷹絵額12面を一挙に公開する予定です。ご期待下さい。



三十六歌仙額のうち小野小町

### 資料寄贈者名簿

敬称略 順不同

元年	南大塚餅つき 踊り保存会	江田 治雄	川野 寿二	鳥海嘉一郎	横田 宗吉
	木村 実	県立川越高校	水谷康之助	大東東小学校	大袋新田 自治会
	金子 一義	田中五郎兵衛	金子 日臣	初雁中学校	菅沼 幸一
	船津 一男	武内喜久江	石井 武久	一柳 庄一	菅原 吉藏
	鈴木 わか	大沢 東洋	金子 哲雄	木村 一男	飯野 正一
	薮島 照次	南田島氷川神社	大澤 孝次	新井 正一	

資料を寄贈いただき厚く御礼申し上げます。平成2年以降は次号以降でご紹介します。  
ご寄贈いただいた資料は、今後「収藏品展」等でご紹介させていただきます。

### \*\*\*利用状況\*\*\*

月	一 般			団 体			共 通			そ の 他			合 計
	大 人	学生・生徒	児 童	大 人	学生・生徒	児 童	大 人	学生・生徒	児 童	他館購入	招 待	免 除	
1月	2,305	141	262	176	0	0	1,352	165	72	1,565	397	2,074	8,509
2月	2,625	184	565	138	28	23	1,233	90	144	1,641	126	9,260	16,057
3月	3,196	429	566	664	0	60	1,362	232	106	2,402	114	2,949	12,080

発行日 平成4年3月31日

発行 川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399